

時事新報定例
時事新報ハ一年三百六十五日一日モ休刊セス其代價
送送料銀料ハ左ノ如ク
一 枚三圓〇〇月別銀料十圓〇〇三月月銀料一圓五十圓〇六月月銀料三
〇〇一年年銀料六圓

Table with 2 columns: 一行, 二行. 一行: 五圓, 二行: 十圓. Includes details about subscription rates and delivery locations.

各地方より時事新報の注文に付
時事新報社は注文に接するも代價を受取らざる間は送
送せざる定めあるに新規注文の方には往々代價を添へ
ずして唯だ注文のみを書面に止り本社に更に代價請求
の端書を送り代金を受取るまで送送を差控へ居り候事
にて雙方の不便あれば御注文の節は必ず代價を添へて
御申込下度尤御切手代用は御断申上候

時事新報

明治二十四年一月一日

東風未だ到らずして嚴寒、春を催すも雖も一夜明くれ
ば千門の櫻竹、新を表して人心自から新に躍躍一歪陶
然として乾坤を俯仰すれば天地萬物亦皆春春さらざる
は亦正に是れ明治二十四年新年の一月一日にして凡
そ日本國中行く處到處る處千里同風の日を同ふしてあ
の情を共にせざる者ある可らず新年の歡情正に斯
くの如くにして其歡の偏に永久からんものと吾人の共
に希望する所されども願みて人間處世の實際を見るに
却て其希望に反するもの少からず古來、人の言に歡
樂極りて真情生ずと云ひ人生不如意の事多しと云ふ其
意味は能く浮世の有様を寫して事實上違ふものと云ふ心
波情海深多くして昨日の歡は今日の悲と爲り今
日の得意は明日の失意を圖る可からず悲歡得失昨是今
非、觀れば實に有爲轉變の世態にして人生の無常
を悟る可しが如し蓋し人間は有情の動物にして事に遭
ひ物に觸るれば自から情を激かして喜怒するものと云
はれされども人生天賦の性質には亦自から聰明空剛のも
のありて社會の事物に處し能く其利害得失を判
し又能く之に當るの力なきにあらざる性質とは即ち智
勇の二つにして皆以て善を判斷し勇は以て事に當る
可し共に人生に就く可らざるの性質にして人々の行爲
に用者の善悪其善爲を失はざるべき事に謹行遠ひ
の慮、少くして世に不平失望の沙汰も歸する可しと
雖も情む可し今の學者士君子流の人々は皆に勇あり
と雖も勇に乏しくして將に智に流れんとするもの多
きにあらず勇も事の大小輕重利害得失を判斷するは即
ち智の能にして吾々人間の世に處するに智力の大切
なるは勿論されども唯事を判斷するのみにて自から之
に當るの力なければ其能は無用にして適以て人心を
亂するに過ぎざるのみ能事無用にして益なきは、猶
其者の勇にして其能の能より取らざる所なれども若し
も我に一尺取能の能神なく所由紀人徳の能を以て機に
斯世の事務を測量せんか其風雲波濤變幻出沒の狀
は唯よく可く知る可きのみにして其能も亦明せず

を得ず蓋し人智は聰明ありと云ふも雖も其聰明には自
から限りなき能はずして限りあるの智を以て限りなき
世態の變化を測量するは到底能はざるのみならず漫に
小智を逞ふして却て判斷の正を得ざるべきは一身以
外社會の萬象總て是れ驚愕の種ならざるはなく頻りに
病を憚れて却て病に罹り憚りに暗鬼を見るの怪を免れ
ず、斯る心を以てすれば年を重ねるは一年の死期を近
ぶするものにて門前の松竹は冥途の塚に異ならず新年
の歡も喜ぶに足らずして一年の計さへ定まらざるの
みならず時々刻々心を勞するのみにして三百六十五日
一日も安心の日はある可らず誠に哀れ甚なき次第され
ども社會事物の成行は必ず其測量の如くならずして
別に自から歸着する所あるを見る可し例へば昨年春夏
の交に氣候どかく順からずして秋の收穫も如何あらん
との掛念より世間に饑饉の恐怖を催はし頻りに心を
痛めたる其痛は空にして秋收の結果は案外の豐作を
其上に米價は割合に下落せずして民間の喜び一方を
らす又昨年は海外の市場不景氣の影響より生絲の輸出
停滯して三萬圓の在荷、積んで横濱に山を爲し年内の
商賣は絶無ならんとの心配も少からざりしに年末に
至りては頗る輸出の路も開けて今後の望もなきに非ず
と云ふ又國貨開設の一事とても其開設には異論なきと
雖も結果の如何に至りては竊に氣遣ひたる者もなきに
あらざりしが扱ひよく開設の上にて實際の有様を見
れば何人も其成功を疑はずして前途の望を屬するが如
く相愛の憂ふるに足らずして事の成行の自から歸着す
る所あるは大抵斯の如きものされば處世の實際に智も
亦缺く可らずと雖も社會の大勢に當りては順に居て順
に安んぜず逆に處し逆に居て居て自ら勇を鼓して
進取の覺悟大切あるを知る可し軍人の説に戰つて勝つ
ときは士氣大に勇み大抵の負傷は速に回復して死する
もの割合に少なと云ふ即ち人生に勇氣の必要ある一
例にして苟も勇氣、内に感あるときは世態人事の變化
浮沈も畏るに足らざるのみならず或は、禍を轉じて
幸と爲し悲を變じて喜と爲すの場合もなきにあ
らず左れば今の學者士君子流の人々も其智に兼ぬるに
勇を以てし小膽小智、漫に苦勞を事とするを止め大勇
大智、社會の活事物に當りて忌避する所なく然かも餘
裕なくして常に滿腹の餘快を存する其愉快は正に新
年今日の歡の如くにして其歡の偏に永久からんものと我
輩の希望する所あり

雑報

○百六歳の老婆
示す所の老婆は天明六丙午年正
月十日の誕生にして今年今月丁度滿一百六歳一箇月の
長壽を保ちたるものあり本貫は栃木縣下野國下都賀郡
國分寺村大字小金井にして青柳彦吉の母名をリイと云
ふ實子一男一女あり男は本年六十四歳女は七十一歳お
り孫の數十五人、玄孫二十人、彌孫も既に二人あり常用の
食物は米飯を半ばづき雑へたる飯に菜は里芋豆腐の類
にして若年より農事に勞働し餘暇には木綿を織りに引
續き織りたてて生活し來れり齡五六十の頃には五斗
俵の米を自由に取扱ふ程の力もあり身體も肥大にして
丈け四尺の衣服を着たる由目今耳は少し遠くなりたれ
ども談話の聲を合點すれば大抵は聞き得べし眼は左
の方開きあれども殆んど不明、右は先づ眼力儘さなり取
目も二三年前迄は一向遠くなく絲織機などの仕事を
爲せし程なり是れ圖にも見ゆる如く結び得るまでに

く残り其色は半ば白みがりたる位のものあり手は幾
十年間畑に出でし日に照り付けられたるしとて色
黒々として堅筋横筋一面に通りあり齒は尙は抜けず今
は劣へて餘り硬き物は噛み得ざれども九十歳頃迄は豆
を炒りて食せしよし實に稀有なる老婆にして新玉の
年立ちかへる如くより斯る目出度う人の話を聞くも尚
に快きみとあるべし指折りて觀へ見れば
其誕生は西洋流にて十八世紀
の末なり
徳川十一代將軍に大御所様と
稱せらるる家齊公は老婆が眞
生の翌年に征夷大將軍とされ

谷風、小野川の兩力士が横綱
免許を得たるは老婆が四歳の時
にして又誕生の五年前淨瑠璃
璃語の元祖常盤津文字太夫が
死亡せりとて人々惜めり山東
京傳、十返舎一九等の戯作者
は老婆の年齢に比して十歳は
かりも上ありしか
カ士四ッ車大八の一連が組
の辰五郎等と芝神明社に闘争
したるは老婆が二十歳の時な
り
大鹽平八郎の亂の如きはメッ
ト後の事にして此時は既に尋
常人間の一生を經過したり是
れより先き仙石騷動もありき
亞米利加のワシントンが大統
領の位に即きたるは老婆が五
歳の春ありけん
佛國大革命の發端としてマス
チヤ城を打破りたるは同じく
五歳の夏七月
ナポレオンが諸國を征伐し將
に帝位を登らんとせる頃は十
八九の歳盛り三十一歳の春そのナポレオンはセント
ヘレナに流されたり
支那の廣東に阿片の騒ぎ起りたるは五十二三歳の間
にあり又長髮賊の如きは云ふに足らず
右の外昔佛蘭西の如き伊太利再興の如き誠に近年の
事共にして要するに今の高齢に開ゆる大政治家
フアドストンは老婆が二十五歳の時に生れ
ヒスマークは三十一歳の時に生れたり
此圖は社員が實際老翁に遇ふて寫し取りたるものあり
又其老婆の年齢は至て正確にして現に其孫に當れる者
福澤先生の取者せり居れり
圖中に見ゆる犬も亦痛く年寄りたるものにて其生れた
るは幾年の前にあるやを知らざれども凡そ二十年以前
馬車會社千里軒の主人由良某が之を連れ來りて老婆に
贈りしものありと云ふ犬も今は老衰し耳も鈍くありて
容易に物音に驚かず何事ありても斯出すさとのみとは
かく地居居眠りて時々ソソリソソと歩むのみ主と阿ヒ
く長命ある是も壽に稱有るものあり

○日本軍艦土耳其行紀事
十一月三十日亞丁に於て 野田正太郎
コロンボより亞丁に至るまで相繼らす天水、渺茫
別に記す程の事もなし左に知人に送りたる書を掲



けて此間の
駐紮之候益々
は霜月三十日
のみ相繼り候
後二時比叢、金
まで二千百三十三
ム亞刺比亞海